

波照間島の日撰曆クリヨンとその周辺

萩 尾 俊 章

はじめに

沖縄県立博物館の波照間総合調査が事業として始まった後に、博物館に1点の写真が持ち込まれた。それは各種の符号が板に記されたものであった。所蔵は北部部落の屋良部功氏である。那覇在住の兄弟屋良部久雄氏を通じて博物館へ問い合わせがあった。それが日撰のための曆の類であることがわかったのは現地へ赴いてからである。アウエハントが紹介したものはあるものの、その実態は不明であった。本稿を記すことになったのはこのような契機からであり、日撰曆の様態とその系譜を若干でも明らかにすることが目的である。

波照間島の村落は島のほぼ中央部に展開している。村落は富嘉、名石、前、南、北の5つあるが、竹富町の一つの区を構成している。戸数は、1998年度現在、北部部落に41戸、南部部落に32戸、前部落に50戸、名石部落に44戸、富嘉部落に37戸ある。日撰曆に関する調査は、各部落を悉皆調査する予定でいたが、調査日数の制約もあり、各部落の主だった家を調査するにとどまった。

1 波照間島の年中行事と曆

波照間島の年中行事には神行事があり、数も種類も多くきわめて複雑な構造を特徴としている。⁽¹⁾ 神行事の日程は干支にしたがって決められる。年中行事の日付はもちろん旧曆で表示され、慣例として行事日取りの干支が必ず付されている。

行事の日取りは年3回の「バンユレー」と称される会合で決定される。波照間の5つの御嶽のツカサ5人と、島の主だった役職にある区長、町議員、総務、幹事のオーセーピイトゥが参加する。祭事を執行するツカサと島の実際の社会生活にかかわる役員との合議で決められることになる。「第1回目は旧曆10月頃、丑（ウシ）の戌（ツチノエ）の日に行われるから、＜ウシンバン＞とよばれ、第2回目は旧曆12月頃の巳（ミ）の壬（ミズノエ）に行われるから＜ミニンバン＞とよばれ、第3回目は旧曆3月頃の酉（トリ）の庚（カノエ）に行われるので＜トウニンバン＞と呼ばれている。第1回目と第3回目は、この島で最も古いとされている外部落阿底御嶽の宗家たる保多盛家において、第2回目は島で最も人口の多い前部落の大底御嶽の司の家において合議が開かれる」という。⁽²⁾ 祭祀の方法も問題となり、神行事の祈願内容や穀物の収穫時期などの生産状況に見合った形で協議されていく。⁽³⁾

こうして決められた行事の日取りは、例えば平成9年5月7日のトリヌバンユレで合議されたものは、「平成9年度（下期）神行事日程」などとして印刷されて、各家庭に配布される。公民館や共同売店にも掲示される。一覧表には、月日、曜日、十干十二支の日取り、行事名、備考として神行事参加者や供物を記してある。

島の年中行事のサイクルは、「節や節分に相当するsisinで始まり、次の農耕年の雨水を願うamijiwaで六月頃に終わる」という。⁽⁴⁾ また、「波照間島の一周期の神行事について、まず判明するのは、これらの行事と密接な関係にある波照間の伝統的農耕期が節を以て正式に始まる点である。アミジワーの後も、穀物の収穫はしばらく続いたので、いわゆる農作時期の一周期は、約9カ月間だったと考えられる。残りの空いている3カ月内にできるだけ、法事、墓掃除、洗骨などの仏事をおこなうのが望ましい」とされている。⁽⁵⁾

2 アウエハント記載の日撰曆

波照間島の公的な神行事は上述のような会合で決定される。ここでは、それとは別に私的な日選びに用いられる日撰曆が波照間で利用されている点を紹介しておきたい。

波照間島の日撰曆の初出紹介はアウエハントによる。「波照間のクリユン」として図解をまじえ解説している。⁽⁶⁾ 古い波照間のクリユンkuriyun（日本語で“繰り読み”、すなわち日数を取る）は、12支の区画（ある場合には、5つの基本的な要素である木・火・土・金・水と結びついている）に基づく吉凶日を考慮するため視覚的な手助けをしてくれる。

ある伝承では、この曆はムッテー（大本）家の人が中国に長期滞在した後に、波照間に持ち込んだものという。また、別の伝承によれば、イナフク（稲福）家の役人が波照間の文盲の農民の利便を考えて、クリユンを導入したとされる。いずれの場合も、それは古い時代のことと認識され、かつしばしばそれは多くの古老によりまだ参照されているという。⁽⁷⁾ アウエハントは“Hateruma”で日選曆の事例サンプルを一つ書写・紹介している。アウエハントが提示した曆は北部の大泊家のそれではないかといわれるが、明らかではない。アウエハントはこの日選

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Rat	子	●	○	○	○	●	○	⊕	○	●	●	○	○
Ox	丑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Tiger	寅	○	○	●	●	○	⊕	○	○	○	○	●	○
Hare	卯	○	○	○	○	○	⊕	○	○	○	○	○	○
Dragon	辰	⊕	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⊕
Serpent	巳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Horse	午	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Sheep	未	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Monkey	申	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Cock	酉	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Dog	戌	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Boar	亥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

アウエハント記載のクリユン

暦について、おおよその日取りの方法と符号の意味について注釈を加えていて、大いに参考になるので、長くなるが摘記しておきたい。⁽⁸⁾

旧暦のそれぞれの日は十二支の循環にしたがって数えられる。もし一月一日が「辰」の日であれば、それから、辰、巳、午、……亥と数え、そのあと「子」の日から始まる循環を繰り返す。クリユンはある特定のことがらをなそうとするとときに都合の良い日を算定することに使用されるが、その前に、使用者は、彼の適当な「カドゥ」を決めなければならない。世俗的な目的や、死者の崇敬に関連しない儀礼行事と関係するカドゥには、三番目（ミーカドゥ）、五番目（イツィカドゥ）、九番目（ハクナカドゥ）があり、この順番でますます縁起がよくなる。算定は次のようにおこなう。もし、使用者が「申」年生まれなら、彼の三番目のカドゥは「戌」、五番目は「子」、九番目は「辰」となる。次に、この三つのカドゥのいずれかは「戌」（勿論、「辰」が好まれる）が、クルユンに示される吉日に一致するかどうかで決定されなければならない。死者の拝みには、四番目または八番目のカドゥが良いとされる。この場合、「申」から逆にさかのぼって数えて、「亥」ではなく「巳」をとることもできる。

○の印のある日は、ジンヌピン＝「天の日」で、この日は太陽（天）が最も大地に接近するので、極めて不吉な日である。例えば、この日に屋根を葺くことは誰も考えない。

○を標した日は、デーミツィ（＝デーニツィ：日本語の大日？）といい、幸先の良い日である。○⁺や●⁺の印は、マタンザといい、マタ・ン・ザ（「枝わかれした座」）またはマタ・ンザ（マタ・ンジャ：「多くの枝を生むこと」）といった意味が付け加わる。このように、マタンザの日は、結婚式には極めて良い日で、結婚から「枝わかれして」たくさんの子どもができるという意味の願いがかなう。同じ理由で、漁には良い日であるが、死者の拝みには良くない。

①の印のある日は、ヌスドゥルといい、家主のヒーヌスに災いがおきる日である。この日には、「主人を連れだし」、例えば、家の新改築やその家の畑でので共同作業で人集めをさせないようににする。もし、この日に畑から家に戻り、病気になると、確実に死であろう。

●の日は、フキス（日本語の不吉）といい、概して良くない日である。⊕と○⁺の日は、それぞれウツィウドゥルギャ、プカウドゥルギャという観念を表わす。ウツィウドゥルギャは、「内側の心配、腹立ち」を意味し、いずれ、鶏、牛、馬、豚、山羊などの動物が逃げていなくなりがちなので、こうした日にこれらの動物を取得することを避けなければならない。プカウドゥルギャは、この反対に「外側の心配」を意味し、従ってこの日はすべての家畜を閉じこめるのによい日である。⊙の日は、ジンクワ（日本語の地火）で、この「土と火」の火は、家・墓の建設、井戸掘り、結婚式やその他の祝事には良くないとみなされる。

クリュンに見られるように、いくつかの日で、二つの記号がお互いに重なったり、組み合わせられることがある。こうした組み合わせは、その日の吉凶が特別に強化されるか、逆に不吉な日が完全に災いをもたらす日になるかのどちらかである。いずれにしても、それを避けることができない。八月の「申」の日は、単にフキスの日であるだけでなく、フキスとウツィウドゥルギャの観念と結びつく。同じように、七月の「酉」の日と九月の「亥」の日は、フキスとヌスドゥルの観念とが結びつく（著者注－アウエハント提示のクリュンでは、フキス●とウツィウドゥルギャ⊕、ヌスドゥル●の各記号が重なるため、記号の判読ができにくいものとなっている）。

アウエハント日撰暦の基本要素は、以上のように、ジンヌピン、デーミツィ、マタンザ、ヌスドゥル、フキス、ウツィ・ウドゥルギャ、プカ・ウドゥルギャ、ジnkワの8種が基本要素となっている。これらの要素が複数で組合わさることがある。

この日撰暦は、現地で“クリョン”、“フリョン”、“フリョーン”、“クヒョーン”、“フヒョーン”などと様々に呼称されるものである。本稿では、波照間で使用されているこの暦について、日撰暦もしくは「クリョン」（話者による限定以外）という表記で統一しておきたい。

3 日撰暦クリョンの様態

波照間島の日撰暦は、アウエハントが紹介した事例を含めると、9例を提示できる。ただ、アウエハントの日撰暦は現存するか否かの確認はできていない。内訳は下掲の表のとおりである。北部落4例、南部落2例、名石1例、富嘉1例である。

この他にも日撰暦を所蔵するか、かつて所蔵していた家があった。南部落の大嵩嘉一氏（大正7年生）の家にもあったが、子どもが石垣に持っていつているという。富嘉部落の米盛家にはクヒョンはかつて板に書いたものがあったが、あまり興味がなかったこともあり、わからなくなったという。同部落の旧家である保多盛家にも、戦前は板製の日撰暦があったが、戦時中に他の資料と一緒に箱に入れて持ち歩いていたためになくなったという。

前部落の前野幸助氏によれば、日撰暦は“クヒョーン”と呼び、祝いの時に日取りをするのに用いた。日撰暦には独特の符号が記されていて、又（フ）のあるのはマタンザ、赤色に塗ったものはフーキピシといい、悪いことを表す。墓を造る時などはこの日撰暦を用い、日取りをした。板や紙に書いたりし、多くは男の人が使った。

同家にもかつては伝存していたようである。波照間では80歳以上の人であればわかるが、どこの家にもあるものではなかったという。別の前部落の話者も、お年寄りはあるが、これが残っているところは少ないという。

そのような話はあるものの、北部落や南部落、富嘉部落などで日撰暦を所蔵する家につ

いて数例の情報を得ており、今後、事例はまだまだ増えると思われる。とりあえず、現段階での収集事例を提示し、その様態を提示しておきたい。

表－1 波照間島の日撰曆一覧

(調査確認分のみ)

番号	所 蔵 家	部 落	材 質	法 量	記載形式	要素種類
1	アウエハント氏調査資料		不詳	不詳	符号記載	8種類
2	美底家	北	センダン (2枚組)	①22.6×27.3 (1～6月分) ②22.5×27.3 (7～12月分)	符号記載	9種類
3	屋良部家	北	センダン (2枚組)	①13.2×38.8 (子～巳分) ②13.3×38.8 (午～亥分)	符号記載	9種類
4	黒島家	北	センダン (2枚組)	①25.5×19.5 (1～6月分) ②25.0×19.5 (7～12月分)	符号記載	8～9 種類
5	宮良家	北	ノート	23.5×24.3	文字記録	10種類
6	新本家	南	ボール紙	32.8×25.4	簡略符号と文字記録併用	10種類
7	勝連家	南	ノート	-----	文字記録	10種類
8	仲底家	名石	ボール紙	32.4×22.0	文字記録	11種類
9	仲白保家	富嘉	ボール紙	-----	符号記載	9種類

事例2は、北部落の美底家にはセンダン（梅檀）の木で造られたクリヨンが伝存している。現世帯主の美底清光氏の祖父は大工をしていた。仕事の関係上、日選曆の使用の機会が多かったと考えられる。同家には、カラシャク（唐尺）も遺されている。

当家のクリヨンは2枚の板に墨書きと一部朱で彩色されたものである。2枚は1～6月分と7月～12月分で分けられている。7月～12月は上部に墨書きが薄く読みとれるが、1～6月分の方は判読できない。美底家のクリヨンは、アウエハント日選曆と同様に、特有の符号と一部文字が付されていて、○印が朱で彩色されている符号もある。ただし、十二

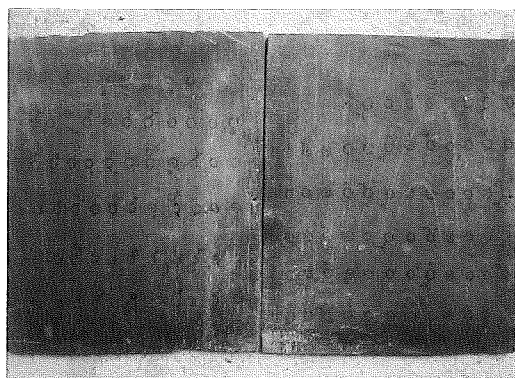
支の文字は付されていない。

この使用方法については美底清光氏が詳しいとの話であるが、調査期間中、ご本人がちょうど体調をくずされているとのことで、聞き取り調査ができなかったのは残念である。現資料の写真を掲載しておき、内容の補足調査については今後の課題としておくが、符号の内容はおおよそが読み取れる。●と○の記号については、側に各々「天」「地」の文字と一緒に付されており、ジンヌピン「天火」とジンクァ「地火」の意味である。また、○、符号に「虫」の文字が付与されていることから「ムシ」と標示される日があることが判明する。他に、○デーミツィ、ノマタンザ、○フカウドウルギャ、○ウチウドウルギャと思われる記号がある。○と○について、他の日撰暦の記号と照合すると、ヌスドウルとフキチなどに該当しそうでもある。基本要素は明確に判定できないものもあるが、9種類ありそうである。したがって、美底家の基本要素はアウエハント日撰暦よりも多く、その配列ないし組み合わせも明らかに異なる。

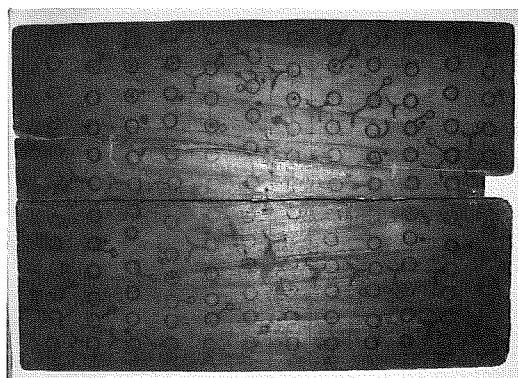
事例3は、既述の北部落の屋良部家の日撰暦である。同家のそれには「永代略歴毎月日観 昭和元年丙卯 新参月式拾日 旧式月拾七日 調屋良部宇喜那」と板の片面に記されている。素材はセンダンである。美底家の日撰暦と同じく、2枚に分かれ、クリヨン特有の符号が配列されている。表に先の表題が記され、裏面に1月から12月まで月暦が記され、子から巳まで分と午から亥までの分の2枚に分かれている。ただし、十二支の文字は美底家日撰暦と同様に記されていない。

屋良部功氏によると、屋良部宇喜那は功氏の母方のおじいさんにあたる。今大戦のときにマラリアで亡くなった。宇喜那氏は石細工が得意で、あちこちから石大工の仕事を頼まれたという。おそらくはそのような仕事柄から、この日撰暦を使用したと考えられる。父の文吉氏もこの日撰暦を使用したという。

日撰暦は特有の符合で記され、一部記号が朱で彩色されている。基本要素は○デーミツィ、●（朱で彩色）、○ウチウドウルギャ、○フカウドウルギャ、○マタンザ、○ム



美底家の日撰暦



屋良部家の日撰暦

シ、○^フキチ、○^フ、○^フの9種類と推定されるが、○^フと○^フの2種類が同一なのか、あるいは指示する内容が異なるのかについては不詳である。配列ないし組み合わせは、アウエハント及び美底家日撰暦ともやはり異なる。

事例4は同部落の黒島家の日選暦である。黒島八重さん（大正11年生）の所蔵するクヒョーンは夫である故黒島孫英氏（明治38年生、85才没）が日取りに用いていたものである。センダンの板に符号で記載されている。この日撰暦も2枚1組の形式で、1月～6月と7月～12月に分割されている。結婚式や家の新築などに日取りを行った。1、3、5などの奇数の数にあてて。2、4、6などの偶数はよくない。自分の健康のための花生けをするときには、自分の生まれ年にあてて、日取りをする。自分が仕事をするとき、何かなそうとするときに必要である。結婚、家の祝い、家の新築・改築、墓の造成、仕事始めなどに使用する。クヒョーンの組み方は家によって異なると語る。

○の印は良い日である。赤い●はウツィウドゥルギャで良くない日である。トの印はマタンザで、これも良くない。○の符号はプカウドゥルギャなどというが、夫が日取りを行っていたので、詳しいことはわからないという。○、●、◎、○^フ、○^フ、○^フ、○^フ、○^フ、○^フの9種類が確認できる。頻出度合いの少ない○^フを加えると、10種類である。

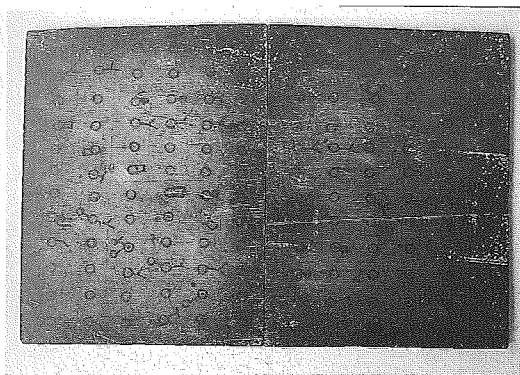
事例5は同部落の宮良家の日選暦で、“クヒョン”と呼んでいる。宮良フジさん（昭和9年生）の生家の父・定勝さんはカツオ漁の船の船長をしていた。漁には日選びは重要だったので、よく用いていたという。カツオ船ではウミバコに暦は入れてあった。本家の伯父・真勢が父の暦を書写していて、それを宮良フジさんが写し取ったものが現在のノート書きの暦である。本人が小学校5年頃の話である。父や伯父は昭和20年に亡くなった。父は防衛召集で石垣へ渡り、40才で西表島の南風見でマラリアのために亡くなった。本家にも残っていたはずであるが、畑小屋などに持っていたりしていたので、そのうちにわからなくなったようだ。

基本要素としては、○、天、マタンザ、ピンポン、ウチ、ヌシドリ、フカ、デンクワ、フキチ、ムシの10種類がある。ジンヌピンなどには屋根の葺き替え仕事などはしない。

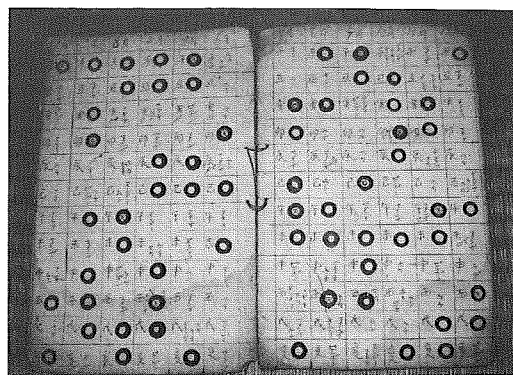
焼香では13年忌までは「壬（癸？）土」の日、33年忌は「庚・木」の日、結婚式や家の祝いは「金」を取る。法事や焼香は「土・水・木」を取る。「火」は家の行事には大凶であるが、漁船は「火」を取る。「火」は栄えものといって、大漁の祝いに通じる。漁をする人はこの日撰暦を用いた。神行事や葬式などの日撰に使用しないという。

事例6は新本長吉氏の家のフヒョーンである。家の新築、墓の行事、焼香などの時に用いたというが、現在ではあまり関心がなく利用されていない。基本要素は○、天、マタンザ、ピンポン、ヌシドリ、ウチ、フカ、フキチ、デンクワ、ムシの10種類である。

事例7は南部落の勝連家の日撰暦である。所有者の勝連文雄氏によれば、“フヒョン”



黒島家の日撰曆



新本家の日撰曆

“プヒョーン”は各家のものにより異なるという。屋良部家のものは以前から違っているという話もある。話者の妻の実家にもあるという。高島曆は「大和プヒョン」といい、それに対してこの日選び曆は「唐プヒョン」といわれる。これは曆を記号で写し取ったもので、「唐曆」ともいう。昔は唐、すなわち中国とも交易していたことから、中国からもたらされたことによる。勝連家の祖先は首里王府から免許をもらって、馬天から船でこちらに来たと口碑される。当家のものは「唐曆」とした備忘録（平成2年度以降）に書き留められている。

基本要素としては、○、天、ウチ、フカ、ジンクワ、マタンザ、ヌシ、ムシ、ピンボン、フキチの10種類がある。「マタンザ」は栄えものの意味があり、結婚式などによい。しかし、家造りには火に対して危ないとの意味があり、嫌われる。マタンザはいいようにもとれる記号である。この日は焼香はできない。「ピンボ」は悪い。「ヌシ」は主を取るといって悪い。「ウチ」はウツウドウルギヤーといって家内部での禍がある。「フカ」はフカウツリギヤーといっている。「ジンクワ」は悪いことを表す。「フキチ」は不吉を意味する。「ムシ」は家づくりのときには虫が入る。

例えば、6月の申（さる）とヌシの日は、焼香については大凶で、33年忌は行っていけないとされる。ヌシ（主）をとるといふ言い伝えがあり、これを行ったために主人が亡くなったことも伝承されている。同じく、6月の酉（とり）とウチについては、これもウチウツリギヤーといつてよくない日とされる。

勝連文雄氏が語った昔話として次のようなものがある。4月の大凶は酉と天・ジンクワ・マタンザであるが、ある人はこの日を良い日と解釈して、家を新築した。そうしたら、天から使いが来て、筆と墨を用意した。火を借りに来た。それを貸して、手を出したら「水」という字を書いた。煙にのって上がることもないし、この家は繁盛した。また、この日に焼香をしたから、あの家は途絶えたとか、あの家はこの日に家作りをしたから火事にあって焼けたとかいう話が伝わっている。

焼香や家作り、健康祈願などひとそれぞれのカードにあてて、日取りをおこなった。

勝連ノートには下掲のようなそれぞれの事柄にみあう、五行と年カードゥを示した簡易表も記載されている。また、家族の生年なども付記されている。

家造り（最初）	土	木	金	年カード 9、11、5、3 ウマハキラウ
作付け（造願）	土	木		
クバナ願	金	木		
健康願	金	木		
法要焼香	土	水		年カード 9、11、5、3
33年忌法要	木			
墓造り	土	水		年カード 9、11、5、3
墓祝い	土	木	水	

昔の人は日取りは嚴重におこなった。特に男性が気にかけたという。ただ、女性でも日取りをよく読める人がいた。この日取りは1人にはとらせないで、3人に日取りを診てもらって当たったら、その事柄をおこなってもよいといわれた。物事の判断は難しいことを知らされるという。

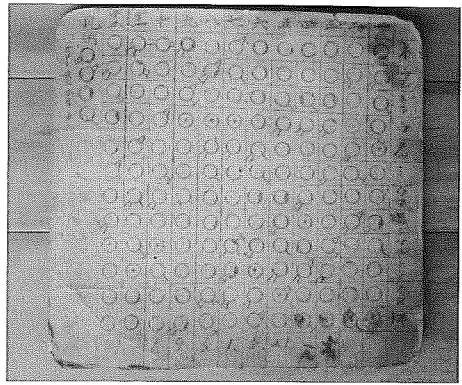
事例8は名石部落の仲底家の日撰曆で、博物館職員の仲底善章氏から提供された資料である。ボール紙に「12支、月別、日取りクリヨン」と表題が記されている。昭和63年10月3日の記載である。この日撰曆は祖父仲底善祥氏のメモ帳から父善吉氏が書写して作成したものである。日撰曆は符号ではなく、文字で表記され、裏面には家族の生年の12支と生年月日が記されている。

基本要素は天火、地火、外、内、虫、又、ピンボ、不吉、ノシ、コロビ、それに何も無い空白の日（デーミツィ）の11種である。9つの事例の中では、基本要素が一番多いという特徴がある。このうち、「コロビ」と表記される要素は仲底家日撰曆のみにみられるものである。同じ名石の前田盛菊江さんによると、コロビの日には家の祝い事はできないといい、あまり縁起の良い日ではないとされる。

事例9は富嘉部落の仲白保家の日撰曆はボール紙に書かれものである。仲白保幸助氏（大正3年生）によれば、「トークヒョン」と呼んでいるという。トークヒョンは唐からきた曆なのでそう呼ぶという。トークヒョンはお祝いや結婚式などの日取りで用いている。

話者の父が語ったところによると、明治の時代に役所の取り締まりで、これらの曆類は全部没収され、処分された。しかし、密かに隠して没収を免れた曆があり、それを書写したのが今に伝えられているものという。管見の限りでは、明治期の新聞資料など曆の取り締まりに関する記事を拾うことができず、いつの頃なのかは不明で、確認はできない。この点については、継続して史料調査や聞き取り調査が必要である。仲白保家のトークヒョ

ンは1961年5月21日に作成されている。これは話者の妻の父西島本加那氏が板に書いてあったものを書写したものである。話者の家にも戦前はあったが、戦時中に疎開している間に紛失したという。トークヒョンには主ドリ、天火、不吉、虫の基本的な符号が凡例として記されている。他に、○、◎、⊙（朱で中に点）、♂、♀の符号がみられる。



仲白保家の日撰曆

以上8つの事例をあげてきたが、全体としては、日撰の符号の意味・内容と日撰曆の使用法は、かなり詳細がわからなくなっている。年配者がわかるというが、しだいにそれらの人々も少なくなりつつある。若年層は高島曆を参考にする人が増えているという。

伝存する日撰曆クリョンは、関係者から書写して遺されたものも多い。仕事上日取りが重要となる大工、漁業などの職種をもつ家に伝えられたケースが多い。また、ツカサなどの神役が祭祀上の日取り選定から、所持する事例もある。現存の日撰曆は板に記したもの（3例）と紙類に記したもの（5例）がある。以前は板に墨で書かれたものがよくみられたという。かつて紙が貴重であったことを考えると、本来は板に記した日撰曆が用いられたと考えられる。

日撰曆クリョンは、伝存・所蔵する家のものにより、月毎の日撰の組み合わせ内容は微妙にそれぞれ異なる。これが、書写元の系統によりなんらかの分類が可能なのかは、今のところ不明である。これは別稿を期して、検討してみたい。日撰曆は特有の符号で標示されるもの（5例）が伝統的な型式であると考えられるが、符号の読みを文字で書いた型式で書写したもの（4例）がみられる。これは、符号の内容及びその日撰組み合わせは変異が大きいのに比して、文字記載の日撰組み合わせは、若干の変異がある程度で類似する箇所も多い。

これらの日撰曆には、当該家族成員の十二支と生年月日が付記されていることがあり、家庭の個々人のカドゥにあてた日選びがなされていることを示している。

4 波照間島の日撰曆クリョンの系譜

前述のように、アウエハントの記述では、この曆は大本家の祖先が中国からもたらした伝承と、稲福家の役人が農民の利便を考えて導入した伝承がある。大本家、稲福家ともに、聞き取り調査をおこなったが、世代交代もあり、日撰曆の伝来に関する伝承を得ることはできなかった。

稲福家には先祖が沖縄から波照間島に来島したという伝承は残されている。稲福家は稲

福里之主に始まるといわれる。稲福の長男は琉球王府に仕え間切を治めていた。その兄弟の次男は石垣に来住し、三男は波照間に来住したという。その三男が稲福里之主である。また、本宅には古い位牌が伝存している。位牌の銘書きには、順治十九年（1662年）、雍正十年（1732年）、乾隆十三年（1748年）の年号が読み取れる。位牌は墨がかなり薄くなっており、判読しにくいところもあるが、当時からの伝世品であるかどうかは定かではない。没年の時代から判断して、当時位牌が備わっていたとは考えにくく、後世に創設された可能性が高い。稲福にも船の掛軸があったという。稲福家の祖先は沖縄本島の首里と伝承上のつながりをもっていることは、島民から認識されている。

稲福家や大本家が導入したか否かは定かではないが、波照間には島外との交流を示す伝承が数多くあり、この種の日撰暦がそのような交流の過程で島外から伝来したことは想像にかたくない。

日撰暦の特有の符号と意味内容は、琉球王府の暦とかかわる「時双紙」、宮古島の「砂川双紙」「砂川暦」とも、類似のものが含まれている。中鉢良護氏は、波照間のクルユンの日撰暦が、砂川双紙や砂川暦と同じく、時双紙の暦注と同じものがみられることをすでに指摘した。⁹⁾ここでは、この点に関して、事例を踏まえながら検討しておきたい。

沖縄県立博物館に所蔵されている2葉の「時双紙」は、戦前中城村熱田の小橋川家に秘蔵されていたもので、それを鎌倉芳太郎が筆写した写本である。原本は戦災で失われたようであるが、写本として残されており貴重である。佐喜真興英氏はこの時双紙について内容の解釈を行った先駆者である。¹⁰⁾時双紙A本の「月のぬし」、「内おとうか」、「外おとうか」、「天地のひ」、時双紙B本の「むしかち」は本稿の日撰暦クリヨンに共通して見出せる名称である。「月のぬし」は田舎の占書には月主、月主わるし、主倒杯とあり意味不明という。「内おとうか」と「外おとうか」はそれぞれフル積吉日、フル積凶日とある。「天地のひ」は、天火、地火と書き、家作等に忌日とされる。「むしかち」は虫頭で、但書きに虫付日とあり、この日に稲を植えると虫がつくことになると信じられているとした。

ここにみえる「月のぬし」は波照間の日撰暦クリヨンの「ヌスドゥル」「ヌシドリ」と称される日に、また「内おとうか」と「外おとうか」はそれぞれ「ウツウドゥルギヤー」、「フカウドゥルギヤー」に、さらに「天地のひ」はジンヌピン「天火」とジnkウ「地火」に、「むしかち」は「ムシ」に相当すると考えられる。

時双紙における各事項の日取りは以下のようなものである。「月のぬし」は十二支による日取りで、正月から12月まで順に、「卯辰巳午未申酉戌亥子丑寅」となっている。「内おとうか」は干支による日取りで、五行の火と「卯戌、巳、申辰、未亥、子戌、寅、卯戌、卯申、卯戌、卯戌、酉戌、申辰」の組み合わせ、「外おとうか」は干支ないし十二支による日取りで、「木・子巳、水金・丑卯、酉巳、火・申巳、火・午酉、木・子未、酉巳、木・辰酉、巳辰酉、

酉巳、辰巳、午丑」の組み合わせである。「天地のひ」は十二支による日取りで、天は「子卯午酉子卯午酉」、地は「巳午未申酉戌亥子丑寅卯辰」の日取りである。「むしかち」は十二支による日取りで、「申亥寅丑申卯丑巳寅丑辰巳」の日取りとなっている。

時双紙は事項により干支や十二支による日取りであるのに対して、日撰暦は十二支による日取りという点で簡略化されている。日取りは、時双紙の「月のぬし」は日撰暦の「ヌスドゥル」の日取り配列と一致する。また、「天地のひ」は日撰暦の「ジンヌピン」と「ジクワ」の日取りとも一致する。ただ、「内おとうか」と「ウツウドゥルギヤー」については、各家毎の日撰暦と日取りが大方一致するか、一部が取り入れられた形跡があるものに分かれるそうである。「外おとうか」と「フカウドゥルギヤー」は各家毎の日撰暦により日取りは若干異なるが、部分的に一致する。「むしかち」と「ムシ」はこの符号がない日撰暦もあるが、これも部分的に一致している。収集した日撰暦は各家毎の事例により各々若干の変異があり、それらの分析と再度の事例収集は今後必要である。

以上のように、時双紙と波照間の日撰暦は摘出した要素については大方の対応関係を見いだせる。この関係は、稲村賢敷氏が先駆的な研究をおこなった宮古島の砂川双紙についてもいえる。⁽¹¹⁾ 砂川双紙にも「天火日」、「地火日」、「主倒日」などの日取りがある。「天火日」、「地火日」や「主倒日」の日取りは、各々時双紙と日撰暦クリョンの日撰と共通する。なお、稲村氏が指摘したように、砂川双紙の「地火日」と「くる（紅）日」の日取りは、古くは中世日本の陰陽道系書物『簠簋内伝』の「地火日」と大凶日でもある「十死一生日」と一致する。

中鉢氏は砂川暦成立の過程を大雑書をもとにした砂川双紙への影響、そして砂川双紙から砂川暦の成立という順序を提示した。⁽¹²⁾ 現在使用されている砂川暦には、双紙の要素として干支の記号、ならびに「不成就日」、「天火日」、「地火日」、「主倒れ日」、「願戻り日」、「紅日」などの大雑書・砂川双紙・時双紙まで遡る記号の暦注がみられ、様々な要素の混入がみられると考えた。砂川暦と波照間の日撰暦とは、要素は部分的に共通する。ただ、符号自体は主に○印を基本として各種のサインを付加している点では、波照間の日撰暦と一部類似しているが、符号の形状や種類は異なっている。

以上、波照間の日撰暦クリョンの系譜を考えると、時双紙や砂川双紙・砂川暦と共通の枠組でとらえることができるし、その背景にある中世日本の陰陽道系の知識、あるいは近世の＜大雑書＞系の暦注書の影響を見出すことができる。八重山の竹原家には『大雑書廣集』、新本家には『日撰見合書』や『萬事日撰見合書』、また糸洲家などの家文書には『大雑書（日撰見合書）』があり、その形跡が窺える。竹原家文書の『大雑書廣集』は「大雑書」と「玉匣記」からの抜き書きがあり、同家には『玉匣記通書廣集』も遺されている。⁽¹³⁾ このように、八重山の石垣島地域においても、日撰書に各種の陰陽道系知識や暦注書の流

布と受容の側面が認められるのである。

おわりに

波照間の日撰曆クリヨンについて、調査の事例から要約できる点を適記して、まとめにかえたい。

- (1) 日撰曆は「唐曆」とも称されており、島外からの伝来を示す伝承が付随している。
このような呼称法は砂川曆における「唐曆」の呼称とも共通している。⁽¹⁴⁾
- (2) 日撰曆クリヨンは近代の時期に行政的な禁止処分がおこなわれたようであるが、ひそかに書写され現存したこと。
- (3) 伝存する日撰曆は、仕事上日取りが重要となる大工、漁業など職種をもつ家に伝えられたケースが多い。また、ツカサなどの神役が祭祀上の日取り選定の必要性から、所持する事例もあるようである。
- (4) 現存する日撰曆クリヨンは板に記したもの（3例）と紙類に記したもの（5例）がある。かつて紙の貴重さを考えると、本来は板に記した日撰曆が用いられたと推察される。
- (5) 日撰曆クリヨンは特有の符号で標示されるもの（5例）が伝統的な型式であると考えられるが、符号の読みを文字で書いた型式で書写したもの（4例）もみられる。
- (6) 日撰の符号の意味・内容と日撰曆の使用法については、詳細がかなりわからなくなっている。
- (7) 波照間の日撰曆クリヨンは、時双紙や砂川双紙と同様な類似の曆注がみられ、同様に、陰陽道系知識や「大雑書」の曆注の影響がみられる。
- (8) 日撰曆クリヨンは伝存・所蔵する家のものにより、日撰の符号内容とその組合せは微妙にそれぞれ異なる。これが書写元の系統によりなんらかの分類が可能なのかは、現段階では不明である。

日撰曆については、中鉢氏の論文に啓発されるところが大きい。また、三浦國雄氏が指摘したように、琉球・沖縄における中国の通書の系統を明らかにすること、また種々の曆法や曆注書を視野に入れた、調査研究が必要である。⁽¹⁵⁾ 波照間島においても、今後ともなるべく機会をみて調査をおこない、資料を収集を継続できるようにしておきたい。調査においては、下記の方々にお世話になりました。紙面を借りて、感謝申し上げます。

【調査協力者・話者一覧】（順不同、敬称略）

屋良部 功（北部落）	宮良 フジ（北部落）	美底 清光（北部落）
黒島 八重（北部落）	大嵩 嘉一（南部落）	勝連 文雄（南部落）
新本長吉・敏（南部落）	前野 幸助（前部落）	南風見武治（南部落）
稲福 清司（前部落）	山田 シゲ（前部落）	仲底 長幸（名石部落）
前田盛菊江（名石部落）	仲白保幸助（富嘉部落）	保多盛嘉一（富嘉部落）

【脚注】

- 1 上野和男「波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集 1996
- 2 宮良高弘「波照間島民俗誌」(5)『琉球新報』1968
- 3 同上
- 4 アウエハント「波照間島の社会宗教的構造をめぐって」『人文学報』No. 62 p139、1987
- 5 アウエハント「波照間島の神行事について」『沖縄文化論叢』No. 3 p37、1972
- 6 C.Ouwehand, Hateruma, Leiden, The Netherlands, 1985. pp.284-285
- 7 C.Ouwehand, p8
- 8 C.Ouwehand, pp.284-285
- 9 中鉢良護「王府の暦をめぐる諸問題」『沖縄文化』28-1、p70～76、1993
- 10 佐喜真興英「霊の島々」『女人政治考・霊の島々』新泉社 1982
- 11 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川弘文館 1957
- 12 中鉢、前掲論文 p76
- 13 竹原家文書の分析については、小池淳一「明治期八重山の陰陽道系知識—『大雑書廣集』の分析—」『宗教研究』第69巻307号、p266～267（1996）を参照のこと。
- 14 岡田芳明「宮古島＜砂川暦＞の研究」『沖縄文化』15 1964
- 15 三浦國雄「リチャード・スミス著『通書の世界』解説」p154、凱風社 1998